



ルイジェルド・スベルディアは成人した後、わずか数十年でめきめきと頭角を現し、ついには戦士長になった。

これは、長いスベルド族の歴史においても、異例の出来事だった。ただそれは、ルイジェルドが優れていたという、ただそれだけの理由でそうなったわけではない。戦争だ。

第二次人魔大戦が終わってから数千年。

魔大陸は長らく平和……というには、少々他種族からの弾圧が激しかったが、とにかく大きな戦いもなく、千年以上の時が流れてきていた。

そんな中、魔大陸に動乱が起きた。

ラプラスと名乗る男が立ち上がり、魔大陸に君臨する魔王たちを次々と従属させ始めたのだ。魔王たちは時に立ち向かい打倒され、時に戦わずしてその配下へと加わった。

ラプラスは一度の敗北もなく、魔大陸に統一の気配が開始していた。

そんなラプラスの手が、スベルド族の集落が多く存在するバビノス地方にも伸びてきた。

スベルド族も他の種族同様、ラプラスに抗うか、従うかという選択を迫られることとなった。

スベルド族は二つの意見に分かれ、対立した。

年寄り連中は反対した。彼らは魔界大帝キシリカ・キシリスの時代から生きている者たちであり、第二次人魔大戦にも参加していた。キシリカへの忠誠が残っていた。ほとと出の得体のしれない男に従うのを是とはしなかった。

対し、若者たちは迎合を選んだ。ラプラスの掲げる正義は、魔大陸を統一し、今一度他種族の住む土地へと侵攻し、肥沃な大地を手に入れようというものだ。他種族から蔑まれ、奴隷のように扱われる現状を正そうというお題目は、第二次人魔大戦時の酷い敗戦を知らぬ若者たちにとって、とて



ルイジェルド・スベルディア。

彼はスベルド族の戦士の夫婦から生まれた男の子で、頑固で融通の利かない子供だった。ただ、喧嘩だけは強かった。

尻尾が取れて成人するまでの間、同年代の子供には一度も負けなかった。

力や敏捷さが他より優れていたかという点、そうではない。

彼よりも体格に優れた子供は大勢ではないが存在していた。

では反応速度に優れていたかといえば、そうでもない。

彼よりも素早い反応を見せる子供も存在していた。

彼も、どちらも、子供たちの中ではトップクラスだったのは間違いないが……。

彼が優れていたのは状況判断力と決断力だった。

誰よりも迷いなく、最適に近い解を選ぶことができた。そのおかげで、どれだけ相手が強くても、勝てるタイミングを見逃さず、勝利を収めることができた。

その上、努力家だった。小さな頃から与えられた鍛錬を一日たりともサボることなくこなし、その上でさらに父親に訓練をせがんだ。

才能があり、適性があり、行動が伴っていた。

ならば結果が出ないわけがない。



つづきは、2022年1月19日(水)発売のBlu-ray Chapter 3 初回生産限定版
でお楽しみください。

も魅力的に見えた。

本来であれば、年寄りたちの意見が通る。

スベルド族は永い時を生きる種族であるがゆえ、年寄りの言葉に重きが置かれている。しかし、キシリカ・キシリスの御世からは、あまりにも時が流れすぎていた。

現状に満足していない若者の数は圧倒的に多く、勢いも強かった。

年寄りたちもまた、現状を良しとしているわけではなかった上、すでに自分たちの時代ではないことを悟っていた。キシリカの威光はすでに弱く、そうした理由を覆すほどの忠誠は残っていなかった。

ラプラス軍に参入する際に、世代交代が行われた。

スベルド族は戦が始まると、村に残る者と、戦に赴く戦士団とで分かれることとなる。

戦士団はスベルド族の中でも特に優秀な者たちが選ばれ、その中で最強の者が戦士長となる決まりになっていた。

ラプラス軍に参入する前に改めて祭りが行われ、全戦士が勝ち抜き戦を行った。

そうして最後に立っていたのが、ルイジェルドだった。

かくして、ルイジェルドは戦士長となり、戦士たちを率いてラプラス軍へと参入することとなった。

戦争がなければ、彼が戦士長となるのは数百年後となっていただろう。



戦士長に就任した際、ルイジェルドはある女と婚姻を結んだ。

ルヴィーリアという名の娘は、ルイジェルドより年齢が上で、戦士ではなかった。

スベルド族にしては珍しく戦いに不得手で、家や村のことを積極的にやる娘だった。

明るい娘で、誰にでも分け隔てなく接するため、若手の戦士たちの間でも人気の存在であった。

ルイジェルドは当時から頑固かつ口数の少ない男だったため、同世代や年寄りの多くから「あいつはよくわからん」とか「いつも怒っているようで怖い」と思われていた。

ルヴィーリアは、そんな彼の数少ない理解者であった。

幼い彼の面倒を姉のように見ていたのが、ルヴィーリアだったのだ。

ルイジェルドは頑固で、時に親の言うことすら聞かない子供であったが、ルヴィーリアの言うことだけは比較的耳を傾けた。

だからこそ、族長はルイジェルドに彼女をあてがいがい、首輪としようとしたのだろう。

それが功を奏したのか、あるいは無意味だったのかはわからない。

だが、ルイジェルドはルヴィーリアと子を作った。傍から見ると、仲睦まじい夫婦にも見えた。